

Hokkaido farmers story ~ 9名の農業者の熱い想いを紹介~

I. 「普通に普通のこと をちゃんとやる」

P1~3

なかのふぁ〜む (滝川市)
(中野 恵介 氏、恵美 氏)

雑に仕事をするのは嫌だ！ やったことだけに満足せずに、丁寧に。



II. 「子育て中の女性が 働きやすい職場に」

P4~6

東海林 幸恵 氏 (札幌市)

農業というツールで、人と人がつながる、子供たちがふらっと立ち寄れるようなふるさとに。



III. 「自分の力を試して みみたい」

P7~9

ドリーミーファーム (標津町)
(千葉 祥一 氏)

牛を健康に、無駄にしない、地域の特性にあった農業をする。



IV. 「好きな仕事ができ て とても幸せ」

P10~12

佐藤 絢也 氏 (旭川市)

「新しい農作物」を取り入れた地域づくりにも挑戦。



V. 「やりたいことが きて僕は、幸せ」

P13~15

AmbitiousFarm (株) (江別市)
(代表取締役 柏村 章夫 氏)

新しい農業の可能性を創造し、人々を幸せにする。「食べる人とつくる人を幸せに」。



VI. 「人と人とのつなが りが大切」

P16~18

(株) グラフィックファーム
(栗山町)
(谷内 智隆 氏、須郷 章生 氏)

地域の農地を受け継ぎ、次世代へ。



VII. 「どんな形でも就農 できる地域にしたい」

P19~21

株式会社マドリン (広尾町)
(代表取締役 角倉 円佳 氏)

私が牛に対して精一杯のことをして、牛の能力を精一杯発揮させてあげたい。



VIII. 「『牛』も『人』も幸 せであるような牧場にし たい」

P22~24

菊地ファーム (広尾町)
(菊地 亮太 氏、亜希 氏)

牛がのびのびと自由に行動し、ストレスなく過ごせるように。



IX. 「農業の可能性が 地域を変える力に」

P25~27

相馬 慎悟 氏 (余市町)

目標としているのは、シナジー (相乗効果) の最大化。



「普通に普通のことをちゃんとやる」

米・畑作

新規就農

女性農業者



○なかのふあ〜む (滝川市) (中野 恵介 氏、恵美 氏)

夫婦、子供1人、夫の両親、祖母の6人家族。前職は、夫婦ともに東京で服飾関係の仕事に従事。夫の両親の元に就農して7年目。

○農園の概要

経営面積：30ha

主な作物：水稲、なたね、えごま、
そば、もち麦等

加工品：なたね油、えごま油

目次

▼ 人生のあゆみ

▼ 服飾関係から農業への転身

▼ 価値ある作物は全てお金に

▼ 「ありのまま」を伝えたい

▼ 自分自身で決断して

人生のあゆみ

夫婦ともに
東京で服飾関係
の仕事に従事

2014年
夫の両親の元で
就農

「うちの畑」開始
(2016年～)

～現在～
2021年の春
両親から経営
移譲

服飾関係から農業への転身

関東で服飾関係の仕事をされていたお二人が、滝川市の恵介さんの実家にUターン就農したのは2014年。恵介さんの実家に戻って農業を継ぎたいという思いに、非農家出身の恵美さんは、農家のイメージが全然湧かなかったが、「北海道農業」の響きが良く、大自然の中で仕事することにも魅力を感じていた。（恵介さんが戻ることを先に決めちゃっていたのもあるが・・・笑）

こうして、実家で就農することになったお二人だが、恵美さんにとっては、北海道も農業も初めて。漠然とありがちな「農家は大変」というイメージを持っていたが、実際にやってみると大変なのは体力面だけだった。植物や生き物を育てることが嫌いではなかったこともあるが、農業は意外と「わかりやすい」ので、ストレスも溜まりにくいと感じている。以前のデザイナーの仕事も好きだからできていたけど、今思えば大変だったと振り返る。この思いは恵介さんも同じようで、農業は、仕事のやり方や進め方、そして休みも自分で決められるので、大変だとは思っていない。

ただ、農業をする上で「女性」が大変な部分はある。それは情報が入りづらいこと、情報を発信する機会や場所が少ないことだった。また、家庭での役割が多く、学びの場への参加に制限を感じ、特に遠方で開催されるセミナーなどへの参加には家族の理解が絶対に必要。皮肉にも、今はコロナ禍でオンラインでのセミナーが普及したことで、情報交換の場が広がっていて、女性ならではの仕事・家庭での悩みなどを率直に話し合えるようになってきている。



価値ある作物は全てお金に

農場でできる大半の作物は農協へ出荷しているが、生鮮野菜などの一部を道の駅で販売していたこともあった。道の駅では、出品したものが売れ残ってしまい、しなびた状態で返品されてくるケースがあり、もったいないと思っていた。こうした経験から始めたのが、野菜が並ばない直売所「うちの畑」。「うちの畑」は、農場に来てもらったお客さんと一緒に畑を見て回りながら、その日のいいものを収穫して販売するカタチ。開催情報の発信はSNSで行い、値段は道の駅などの価格を参考に決めている。「日曜日の午前中だけ」開催することで、二人の1週間の生活リズムづくりにもなっている。来客数は日にもよるが、3~20人くらい。天候に左右されるので、天気が悪くお客さんの少ない日は、単なる夫婦の休憩時間になることも（笑）。

お客さんの多くは、滝川市近郊の方だが、札幌から来られる方もいる。子供に収穫を体験させたいという親御さんもいて、トマト嫌いの人が「なかのふぁ〜む」のもぎたてトマトなら食べられるという。

売れ残りがもったいないと始めたことだが、お客さんに「こ



こ」に来て、見てもらうことが値段以上の価値になった。畑を見てもらうことで、安心して買ってもらうことにつながると実感している。ここ2年はコロナ禍の影響により開催できずにいるが、リピーターのお客さんから、今でも野菜のほか、米などの注文もいただいている。

「ありのまま」を伝えたい

なかのふぁ～むでは、以前から恵介さんのお母さんが、自宅の加工場で無添加で搾油したなたね油を販売していた。恵介さんと恵美さんの代となった今では、搾油は委託しているが、自家産えごま油の販売を始めており、健康も意識した商品として注目されている。加工品については、流行りにさせるのではなく、クチコミでじわじわとファンの信頼を得て、長く続くものにしたいと考えており、新たに自身で狩猟した鹿肉を使ったジャーキーなどの加工・販売も始めた。

お二人には、もともと家族に「いいもの」を食べさせたいという思いがある。「いいもの」のために、農家が栽培や加工に取り組む上で大切なことは、普通に普通のことをちゃんとやることだと考えている。そして、「ありのまま」を伝えることが消費者の信頼を得る近道だと思う。見た目だけ、キレイさだけにこだわっても意味はない。農薬の必要性なども含めて、消費者にも「ありのまま」を伝えることが大切だと考えている。



自分自身で決断して

他業種から就農してきたが、農業が大大大好きというわけではなく、家族が暮らしていくための仕事として意識している。ただ、矛盾かもしれないが、本物のみどり色を知ることができたり、風の強さを感じられたり、これが自分たちにとっては最高の職場環境でプライスレスだと感じる。自分たちが感じていることを、ここに来られた方にも同じく感じてほしいと思っている。農業は自然が相手なので、大変なことも多いが、心の豊かさにはつながると思う。

就農に向けて準備をする際や就農してからも、いろいろなものを見て、いろいろな人の話を聞いて、吸収して、何が価値で、何がやりたいことなのかを見つけ出してほしい。ただ、初期投資も大きいので、一度始めたらなかなか辞めるのは難しい面もある。

このインタビューが誰かの就農への「きっかけ」になってくれるのであればいいが、「決め手」にはほしくない。農業をするかどうかは、自分自身の将来のこと。しっかり考えて、決断してほしいと強く願っている。



※ なかのふぁ～むの HP の詳細は、
左記 QR コード参照。
URL : <http://keisukenakano.com/>

「子育て中の女性が働きやすい職場に」

園芸

女性農業者

働く環境



○東海林 幸恵 氏 (札幌市)

(株)ふるさとファーム代表。

「家庭で調理する内食向けの新鮮な野菜の提供」や「食の大切さを子供たちに伝える活動」に意識的に取り組む。

○農園の概要

経営面積：5 ha

主な作物：ミニトマト、長ネギ、
寒締めほうれんそう、
ズッキーニ等

目次

▼ 人生のあゆみ

▼ 農業を通じて地域とつながる

▼ 子供たちに農業を伝えることは農業者の仕事

▼ 女性の力が活かせる農場

▼ 人と関わりを持つことが大切

人生のあゆみ

農業教員を目指して大学へ進学

NPO法人で農業指導補助員に従事

2011年、二人のメンバーと一緒に法人を立ち上げて就農

～現在～

法人の代表に就任
面積も拡大し、札幌市内を中心に新鮮な野菜を届けている

農業を通じて地域とつながる

東海林（とうかいりん）さんの実家は道東で酪農を営んでおり、小さい頃から農業が身近にあった。当時は祖父母が開拓し、両親が規模拡大に取り組んでいた「大変な仕事」という印象が強く、将来農業に関わろうとは思っていなかった。転機は高校時代。農業科目やプロジェクト学習を通して農業と食品の密接な関わりや環境保全など農業の多面的な機能を学べたことがきっかけで、農業に携わる道を考えるようになった。その後、農業教員を目指し大学へ進学したが、農家実習の経験を経て、自分が何も知らないことに気づかされた。卒業後は大学の先生のNPO法人で、農業指導補助をすることに。その時に今一緒に農業をしているメンバー2人と知り合い、2011年に会社〔(株)ふるさとファーム〕を立ち上げて就農した。設立当初は農場長の立場だったが、2015年に代表となった。



就農当時は、ミニトマトを中心に、露地ではスイートコーンや葉物野菜などを栽培したものの、ことごとくエゾシカの食害にあったため、食害の少ないズッキーニの栽培に取り組んだ。収入面で期待していたスイートコーンをやめたのは痛かったが、冬場の収入確保や地元野菜の通年供給を目的に、寒締めほうれん草の栽培にも取り組んでいる。

また、2018年からは露地栽培を拡張し（2ha）、エゾシカがあまり好まない長ネギの栽培に力を入れている。しかし長年使われていなかった農地は、木々が生えており、その再生には大変な労力を費やしたが、よみがえっていく畑の姿を見た町内の方々からは、喜びの声や、励ましの言葉を頂いたという。「農場に訪れたみんなのふるさとになるように」という思いから会社名を決めた東海林さんたちにとって嬉しい瞬間だった。

子供たちに農業を伝えるのは農業者の仕事

東海林さんは、「就農してからは、子供たちに農業を知ってもらうことは農業者自らが取り組まなくてはいけない大切なことだと思うようになった」と話す。

小さい頃から祖父母や両親の働く姿を見て、農業は自分たちの食生活に直結する「大変だけど大切なもの」だと感じていたそうだが、大変さの前に「楽しい」をプラスしながら、農業が身近ではない子供たちにも伝えていく方法を考えている。

就農の翌年からは、日々の作業に追われながらも農場の一角にある小さな田んぼや畑を活用し、子供たちがお米やじゃがいも、にんじんを栽培し、その収穫物を使ったカレーライスを食べるまでを体験する食育プログラム「カレーライス畑」を実践。生産していく中でどうしても発生する規格外の野菜を食べてほしいという思いで、札幌市内の養護施設に提供したことがきっかけで養護施設の子供たちを畑に招待する「カレーライス畑」がはじまったという。また、地域の子供たちが脱穀した稲わらを東京で行われる農業イベントに持ち込み、東京の子供たちと稲わらリースづくり体験も行っており、そうした活動が認められ、2018年には第2回食育



活動表彰（農林水産大臣賞）を受賞。

「近年はコロナ禍でなかなか集まる機会を作れないでいるが、子供たちが楽しんで真剣に取り組む姿に奮い立たせられている。農業は大変だけど楽しい部分もあるんだと伝えたい」と話す。

自然の中で生きることにつながる大切な「食」に子供の頃から触れてもらうことは、彼らが過ごす時間の中で生きていくと思うし、農業という仕事を知ってもらうことは、将来の担い手や消費者につながっていくことだろう。

女性の力が活かせる農場

農業は体力が必要で、どちらかというと男性が向いているという印象が強いが、東海林さんは、女性ならではの視点も必要だと話す。例えば、スーパーなどで買い物をするのは女性が多く、商品として並べた時のサイズ感や値段など、お客さんの目線で考えられるのは女性の強み。そのために、袋詰めや価格設定は東海林さんと女性スタッフが相談しながら行っている。

そうした女性の力を農場で活かしてもらうため、子連れ出勤も可能としており、子供や家庭の都合を優先し、子供の看病による早退や家族旅行、学校行事などの予定は100%叶えるなど、勤務時間や勤務日数に配慮している。一緒に来た子供たちにはラベル貼りを手伝ってもらったり収穫した野菜を運んでもらったりと、ふるさとファームは、子供が農業とふれあう場にもなっているようだ。今年スタッフの半数が子育て中の女性で、「雇用する側として、働きやすい場を作るのは自然なこと。自分も子育てをしているとみんなが助けてくれるので気持ちがわかるし、作業に遅れが出た分は次の日に頑張ればいい。子育て中の女性の働きやすさは大切にしたい」と、東海林さんは話す。



人と関わりを持つことが大切

東海林さんは、農業を目指す人に向け次のように話してくれた。

新規就農する方は、相談できる相手を作ってほしい。農業は人と関わらなくていいイメージを持って相談に来る人もいるが、例えば、生産組合等が少ない札幌では、自分で販売まで考えていかなくてはならない。私は、主にコープさっぽろのご近所野菜コーナーに「札幌野菜」のロゴを入れたパッケージで販売したり、一部の品質の高いミニトマトは「札幌蕃茄(ばんか)」とブランディングし、きたキッチンのほか、有楽町のどさんこプラザにも納品している。人と関わることは、販路開拓や日々の交流等、どれを取り上げてでも欠かせないもの。お店の人やお客様、農業体験等、いろいろな場で知り合った方々を大切にしてほしい。



※ 株式会社ふるさとファームのHPの詳細は、右記参照

URL: <https://www.furusato-farm.jp/>



「自分の力を試してみたい」

酪農

農家後継



○ドリーミーファーム（標津町）

千葉 祥一 氏

牛目線を大切にしながら、放牧、フリーストール牛舎、つなぎ牛舎を使い分けて経営を行う。TMRセンターを運営し、地域全体の振興に寄与している。

○牧場の概要

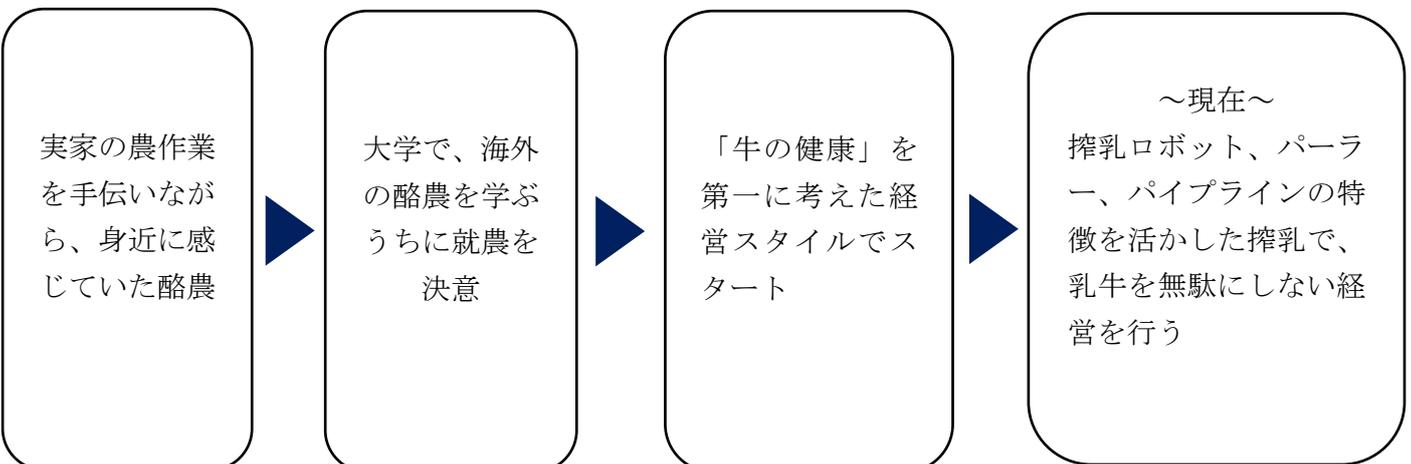
経営面積：193ha（採草放牧地）

主な経営：酪農（経産牛・育成牛含めて530頭程）

目次

- ▼ 人生のあゆみ
- ▼ 牛を無駄にしないために
- ▼ 若い人がやりたい酪農の姿
- ▼ 酪農家を支えるTMRセンター
- ▼ 酪農をやりたい職業に

人生のあゆみ



牛を無駄にしないために

実家は酪農家で、幼少期から牛舎に行き、朝晩の作業の手伝いをしていていつも酪農が身近にあった。その時は、跡を継ごうとは思っていなかったが地元の高校に進学し、ラグビーにも励んだ後、農業系大学へ進学した。

大学では、酪農の農業経済学科を専攻したが、その理由は将来、就農しなくても別の就職先にいけるようにという考えだった。

しかし、ニュージーランドの管理放牧に詳しい教授から、放牧酪農は、とても管理された飼養形態なんだと学ぶにつれ、酪農がおもしろいと感じ、その時に将来、酪農を仕事にしてみたいと思った。

在学中に勉強をしていく中で、地域の特性に合った酪農をしなければ継続的な営農はできないし、ただ牛を飼育するだけでは経営ではない。そんなことを思いながら、常に実家の牧場を客観的に見ていた。

本当に実家の経営のやり方が正しいのだろうか。もっと良い経営方法はないのか。その考えは今でも同じで、色々なことを考えながら、日々取り組んでいる。

ドリーミーファームでは、父の代からのつなぎ牛舎（千葉牧場）と新設したフリーストール牛舎で乳牛を飼養するほか、地域の酪農家とともに、TMRセンターの運営にも携わっている。

千葉牧場ではパイプラインで搾乳、新設の牛舎ではパーラーとロボットで搾乳している。1つの搾乳方法だと、牧場に合わない牛は、市場へ売る牛になってしまうのだが、2つの牧場の異なる機能を活かすことで、牛をフルに使うことができる。牛を無駄にしないためにはどうしたらいいか、適切な飼養方法は何かを考え、指導農業士である父に相談しながら、作り上げたスタイルだ。

就農時から、親から独立して、自分の力を試してみたかったので、親がやってきたこと（固定概念）が本当に正しいのかも考え、常に創意工夫しながら、牧場の経営にあたっている。



若い人がやりたい酪農の姿

ドリーミーファームには、フリーストール牛舎には、搾乳ロボット、餌寄せロボット、監視カメラ等の ICT をフルに取り入れている。

搾乳ロボットは、飼養頭数を増やしても効率良く作業ができるため、余暇時間を作りたかったのが、導入のきっかけ。導入してから3～4年目で、週1回の休みを取れるまでになって、子どもと遊ぶ時間もできた。また、監視カメラを設置したことで、家でも現場と同じ感覚で牛を観察できるようになり、全体に余裕が出てきた。

空いた時間で、週2～3回程度、地元のサウナを利用し、心身ともにリフレッシュする等自身のケアにも気を遣っている。こういう時間はすごく大事だと思う。

今後はこういった農作業をしたらうまくいかなど考えるようにもなった。常に新しいことを考えながら、変化を求めていきたい。

サラリーマンも同じだと思うが、本人の意志がしっかりしていないとダメだと思う。

昔の酪農は、365日働かなければならなかったけど、今は違う。若い人がやりたいと思う酪農でなければならない。だから、今の時代にあった酪農を自分たちが考え、見せていくことが大切だと思っている。

うちでは今のところ、3代目となる後継者のことは考えないことにしている。子供達がやってみたいと思うなら、やればいいし、子供達の考えに委ねたい。子供達に作業を手伝わせることもしないし、自然体でい

てくれればいい。

規模拡大に伴う労働力は、地域内ではなかなか見つからず、外国人技能実習生に来てもらっている。実習生に話を聞くと、頑張って働いたお金は、母国で家を建てる資金にあてられている。だからこそ、実習生は真面目だし、一生懸命学んでくれる。また、驚いたのは、実習生の SNS 発信力。母国の家族や友人とのつながりが強いので、母国で標津町の酪農を発信されても、ここの牧場は、いいところだねと言われるように心掛けたい。

酪農家を支える TMR センター

祥一さんは、父が代表を務める TMR センター [酪縁・^{らくえん}緑] の飼料部門の部長も担っている。このセンターは、7 戸で構成され、各農家に合った飼料を牧場まで届けており、個々の経営を継続もしている要素もある。

それぞれの農家の飼養形態が異なるため、微妙な配合が求められることから、飼料設計に当たっては、農家や普及センターの意見も取り入れながら行っている。時には現場まで行き、なぜ今の飼料が合わないのか、飼養形態を細かくチェックし、徹底的に分析している。こうした活動の結果、構成員の出荷量が増えるなどセンターが個々の経営に貢献している。



酪農をやりたい職業に

本来こんなことをやりたいのではなかったと後悔するようでは、うまくはいかないよ。夢や希望だけでは、酪農はできない。

就農した時は、休む時間が無い、寝る時間も少なかった。学生時代に思い描いていた理想と現実とはまったく違ったもので、これが、父の姿から見ていた酪農だったのか、こんな作業もあるのかと。

実際に現場に出てみて、技術以外で大変なことは体力だった。

自分自身、高校時代にラグビーで培った経験もあって、体力には自信があると思っていたが、就農当時は、腰を痛めることもあり、痛めても仕事を続けなければならない、風邪を引いても休めることはなかった。

現在では、酪農ヘルパー制度により、サラリーマンと同等の福利厚生ができていると感じる。搾乳ロボットを導入したことで、休みが取りやすい環境につながったし、次の世代に合った職場環境を作っていくことを意識しながら、色々な方法を考えていきたい。

酪農という職業が、将来、隣の芝生は青いよねと言われるような産業にしたいし、みんながやりたいと思える職業にしていきたい。



「好きな仕事が出来て とても幸せ」

複合経営

農家後継



○佐藤 絢也 氏 (旭川市)

夫婦、子供3人、母の6人家族。20歳で就農し、水稲を中心とした複合経営により、収益性の高い農業を実現。現在、東旭川農協の理事も務める。

○農園の概要

経営面積：20ha

主な作物：水稲、春小麦、大豆

ピーマン (ハウス)

サツマイモ 等

目次

▼ 人生のあゆみ

▼ 反抗期もあったが、農業が大好き

▼ 目指すは新しい産地づくり

▼ 目標(夢)を大切にしてほしい

人生のあゆみ

子供のころから父親の手伝いを通じて、農業に慣れ親しむ

反抗期を迎え、工業高校に進学するも、やっぱり大好きな農業に

道立農大に進学し、農業の道へ

20歳で親元に就農

～現在～
東旭川の未来と長男の就農がとても楽しみ

反抗期もあったが農業が大好き

旭川市東旭川町で生まれ育った佐藤さんは、小さい頃から実家の田んぼや畔が遊び場。農業を営む父親が運転するトラクターにも同乗させてもらうなど、農作業の手伝いを通じて、農業に慣れ親しんできた。農業が大好きで、朝早くから夜遅くまで作物と向き合う父親の背中を見て育ってきた。

やがて反抗期を迎えた少年時代は、実家の跡を継ごうとは思わず、地元の工業高校に進学した。

高校3年生の夏になると、皆が卒業後の進路について悩み、佐藤さんも自分の進む道について考えた。そして、やっぱり子供の頃から大好きな農業をやりたいという思いから、高校卒業後は、北海道立農業大学の稲作コースに進学。父親の跡を継ぐことを決意した。

実家の後継ぎとして就農した後は、父親からは「仕事は手を抜くな！作物と話ができるようになるくらい観察しろ！」と教わり、そうなれるように今でも日々努力している。

現在、佐藤さんの農場では、水稻をメインに栽培しており、その他にも春小麦や大豆、ハウスでピーマンなどを栽培している。この野菜等を含めた複合経営は、父親の代に始めており、所得の確保につながっている。

水稻のみの単作の場合、2021年のように米価の下落があると経営が苦しくなってしまうが、ほかに畑作や施設野菜などの作物が加わることで、リスクが分散され、経営が安定するように工夫している。

現在、佐藤さんの長男は、佐藤さんが“農業のいろは”を学んだ、北海道立農業大学校に在学。卒業後は、実家の経営を継ぐ予定で、今後5年間のうちに長男への経営継承、面積拡大や法人化を考えている。

佐藤さんは、「昔から、将来やりたい仕事を考えて、自分で高校を選びなさい」と言ってきた。高校卒業後の進路についても、4年生大学も勧めたが、長男の意志で農業大学校への進学を決めた。

今は、将来について遊び心で「果樹もやってみたいよね」と長男と話をしている。実際に“できる”“できない”に関係なく、これからの佐藤農場の将来の「夢」を二人で語り合っている。

そう笑顔で語る佐藤さんからは、大好きな農業を長男と一緒にできる喜びが伝わってきた。



目指すは新しい産地づくり

東旭川町は、米、畑作、施設野菜、畜産など、様々な農業が行われており、周りには旭山動物園や工業団地もあって、とても住みやすい地域。この町で生まれ育った佐藤さんは、地域振興のプロジェクトチームの要職を担い、東旭川農業の発展に尽力してきた。

「この東旭川地域があつての僕らだと思っています」と語る佐藤さんは、地域やそこに住む農業者、そして農協も大切にしていきたいと考えている。

今は、個人でなんでも自由に販売ができる時代。農家一人だけで儲けようと思えば、農協を通さずとも、努力すればいくらでも稼ぐことができる。自



分一人で販売することも大変だと思う、しかし自分だけ良い思いをすればいいというのは、佐藤さんが考える農業とは違う。

佐藤さんが考えるこれからの東旭川の農業、それは、地域で協力して従来の農作物に加え「新しい作物の産地」を作ることだ。大きい産地じゃなくていい、「東旭川に行けば、トマトやピーマンなど色々あるよね！」と言われるように他地区には無い作物の産地を作って、農作物のバラエティ豊かな地域にしていきたい。その一つの新たな取組みとして、2020年にサツマイモ（シルクスイート）の栽培を始めた。

これから、この地域の農家は、米に次ぐ作物を探していかなければならない。しかし、個人で頑張っても限界があるので「みんなで頑張って、みんなで生産してみんなで儲ける方が良い!」。この地域のため、未来の自分や後継者達のために「新しい産地」を作りたいと考えている。

東旭川でも他地区と同じように後継者、担い手不足で1戸当たりの耕作面積が拡大し負担は増加。東旭川でも法人化は進んでいるが、やはり「地域あつての法人で、法人あつての地域」だと思う。この地域をどう少人数で守れるか、今後、まだまだ地域みんなで考えて行かなければならない。

目標（夢）を大切にしてほしい

佐藤さんがこれまで農業に従事して思うのは、自分が好きな仕事が出来るということは、とても幸せだということ。だからこそ、頑張り続けられる。

農業は、頑張れば頑張るだけ自分に返ってくる。これからも手を抜かず頑張りていきたい。

佐藤さんが身に着けた方が良いと考えるスキルは「経営力」。一度、会社勤めをされて、Uターンで就農した人の方が、視野が広く考え方に柔軟性があり、経営展開が上手に見えることがある。佐藤さんは、これまで経営については、父からしか教わっていない。昔ながらの農業の考え方も大事であるが、農業経営も会社経営と同じで、経営力をしっかり身に付けておいた方が柔軟性のある経営展開が出来るのではないかと語る。

自分自身の経験もあり、経営継承を予定している長男には「法人経営のノウハウを学んで来い!」と言っている。農業の栽培技術は学校でも、または就農してからも学べるが、経営力を身に着けるのは、なかなか難しい。学生だからこそ色々な法人が受け入れをし、教えてくれるので、こうした機会を大切に学んで欲しいと思っている。

そして、これから新規就農する人は、「夢」をいっぱい持つことを大切にしたい。「夢」がないと、ただ作物を作っているだけになってしまう。大きい「夢」を持ち努力し、たまには壁に当たっても、挫折しないように頑張してほしい。ただし、現実を見て、叶わない夢もあることを理解することも必要。「夢だけにならないように努力してほしい」と話す。

